

30年後の社会を見据える 「けいはんな未来」懇談会のあり方

けいはんな学研都市に新たな街が生まれたのは、携帯電話が肩掛け型で3kgもある時代であった。それから30余年が経過し、科学技術の進歩は思いもよらない素晴らしく便利なモノやサービス、さらには高度な医療などを私たちにもたらした。反面、社会は広範囲にわたる重篤で構造的な課題に直面している。盤石と思われていた社会の様々なシステムが、意外に脆いことに気づかされた今、これからの幸福をより確かなものにしていくために、何を考え、どのように行動していかなければならないのか。それを見通すには、この街がこれまで経験してきたのと同じ、30年というスパンで未来を考え、目標を明確にした上で、一步一步着実に歩んでいくことが求められている。

①30年後の社会を見据えるということ

けいはんな学研都市の街づくりを検討するにあたり、未来懇は30年後のあるべき姿を標榜して、街のコンセプトを策定していくというスタンスをとっている。10年という年月は、ある程度、時代が変わるのに必要な時間であるが、その変化が顕在化するには短い。20年は、時代の変化が顕在化してくるものの、まだ変化の途上にあり、変化の前後を評価するには短い。30年という年月は、ほぼ世代が1世代過ぎ、過去の常識を覆す変化が生じた上で、その変化が「常識」として定着するのに要する時間、つまり真の意味で「今」と「一昔前」とを区切る時間と捉えることができる。

このとき、次の10年間でやりきってしまうまいといけないうと、もっと先の30年を目指すものをある程度峻別して議論を展開していく必要がある。なぜなら、未来検討においては、「30年後を構想して」としながらも、今から5年以内には解決しなければならないような直近の課題や、30年後には収束しているようなものに意識が向きがちであるためである。「課題先進国」と言われる日本にある様々な課題においても、30年後には片が付いてしまっているものも多いと考えられる。

例えば、この街が構想された時点で奥田東先生が影響を受けられたローマクラブの『成長の限界』、これは1972年の出版であり大阪万博のわずか2年後になるが、「その時代にこういうことを考えていた」ということで、いくつかキーワードとなるものを抽出してみると、そのほとんどは今でいう「持続可能性の危機」について言及している。さらに興味深いこととしては、時間軸と空間軸についての言及があり、未来予測というのは「時間的にも空間的にもいちばん遠いところにあるものを見ることが必要であるが、一般的にはその逆にある両軸のいちばん近いところ、つまり現時点で目に見える課題についての論議に陥ってしまうので、意図して遠くを見ないと30年、40年先は読めない」ということを述べている。

さらに、『成長の限界』を書いたローマクラブの著者の一人であるヨルゲン・ランダースが2012年にその先の40年の未来予測をした『2052 今後40年のグローバル予測』という本を記している。ランダースは、「40年前に環境問題や資源枯渇の

問題を『成長の限界』で指摘したが、大変な非難を浴び、『そんなことはない』と誰も耳を傾けなかった」経験から、かなり悲観的に将来を読んでいる。世の中がまだGDPを伸ばすことが最優先と考えているために社会は必ずオーバーシュート¹し破綻してしまうため、経済成長よりも幸福度の上昇というものを見ていかなければならない。また、中国についても様々な見方があるもののすぐには崩壊せず、これからも経済規模を伸ばしてくるであろうことから、それに対してどのように対応していくのかということが重要になるとしている。さらに、先進国においてこれからの40年はGDPがそれほど伸びず、少子高齢、人口減少が進んでいく中で、産業として老人介護やヘルスケアの比重が増え、それにより労働生産性が向上しなくなるので、GDPはせいぜい横ばいか、少し減っていくしかない指摘している。

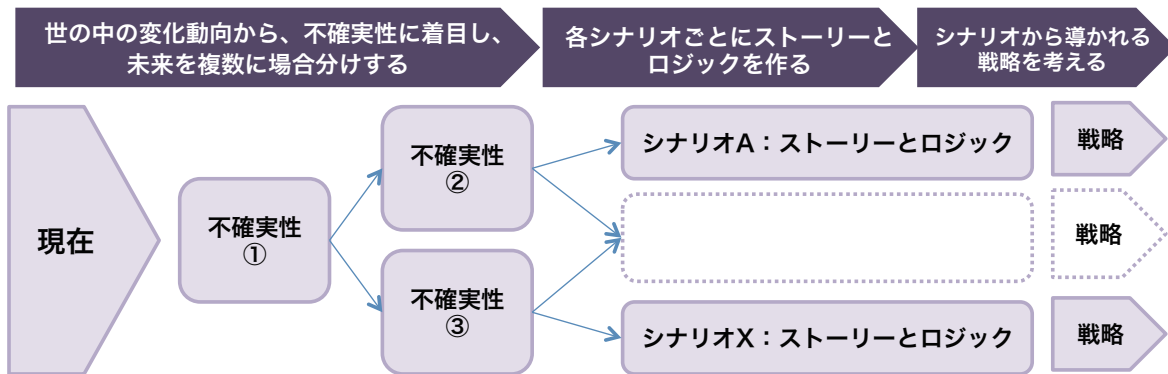
②起こり得る未来を認識するーシナリオプランニングー

30年後といった未来を予測し、対応する戦略を構築するための手法としてシナリオプランニングがある。シナリオプランニングにおいては、将来起こり得る環境の変化を複数のシナリオとしてストーリーとロジック²を作成していくが、それを決めていくためのシナリオドライバー、いわゆる不確実性要素をいくつか抽出して、それによって楽観的なシナリオから悲観的なシナリオ、さらに一番起こり得そうなライクリーシナリオとおおよそ3本程度設定することが多いが、いくつかのシナリオ群をつくり、未来がそのシナリオのどの方向に行っても対応できるように、それぞれのシナリオから導かれる戦略を構築していくものである。世の中が進んでいく中で変化に大きな影響を及ぼすものをドライビングフォース³というが、それをもとに、変化を読みながら、その変化に対応した戦略を選択していく。幅を持った未来予測をした上で、「そのような変化が現実のものになったらどういう戦略をとるのか」という戦略的示唆について考察するものである。

例えば、一般的に言われている悲観側と楽観側の両翼に相当するシナリオを仮に示してみる。悲観的な未来では、地球のオーバーシュートと崩壊が予測される。異常気象による干ばつや洪水、海面上昇、台風の強大化、雷雨や豪雨の増加が発生

1：適度な水準を超えて制御不能に陥ること 2：論理的な筋道

図1：シナリオプランニングの流れ



する。その結果、食糧生産高の落ち込み、水不足、伝染病の蔓延、社会不安の増大がもたらされる。食料は異常気象やバイオ燃料の普及も手伝って高価な商品となる。品種改良や機能性の付与も価格上昇に寄与する。分配の問題も解消せず、安心安全で栄養価の高い食料は高所得者しか手に入らない。ごく少数の人が特権と富を独占し、食料、エネルギー、安全、健康、生物多様性は特権階級のみが大金を払って享受できるものとなり、多くの人々は一日一日をどうにか生き抜くことに精一杯となっている。新たな解決法ができる前に古い方法が消滅してしまい、地球はオーバーシュートし、人類の平和と繁栄は崩壊する。

一方、楽観的な未来では、地球と人類の平和と繁栄が予測される。世界の崩壊は国家、企業といったあらゆるレベルの管理能力不足が招いたある種の「進化」とされ、その危機を克服するために非連続的な変化が起こり、それまでとは全く異なる世界秩序が形成される。貧しい国の経済発展や貧しい人々に富を再分配する取り組みが展開され、貧困が解消に向かっていく。エネルギー効率が上がり、再生可能エネルギーに切り替わり、森林破壊がなく、CO₂の回収・貯蓄が進むことにより、気温の上昇が収まり、気候変動が緩やかになっている。そして、多様な価値観が最小限の摩擦で共存しながら人類共通の目的として平和と繁栄を目指して生きている。

このように、将来起こり得る環境変化を複数のシナリオとして描き出し、その作業を通じて未来に対する洞察力や構想力を高め、不確実性に対応できる組織的意思決定能力を培うことで、「予想外のことが起こった」ということを避け、将来の変化に対する耐性の高い戦略とその遂行力を確実なものとする。さらに毎年、定期的・継続的に見直していく体制を維持していくことの重要性についても書き残しておきたい。

③30年後の課題感

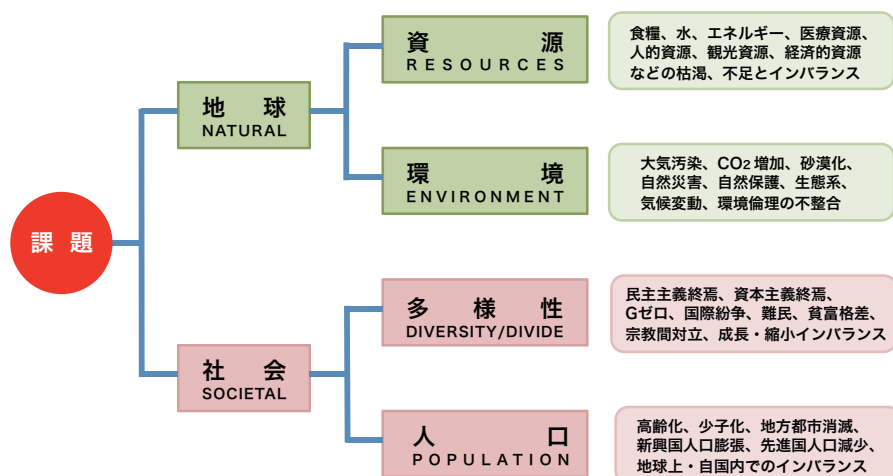
未来懇において、今後さらに30年後の課題を個別的に考察していくにあたり、これまでの議論や検討から得られた30年後を見た課題をマクロに整理すると、「地球」の問題と「社会」の問題の大きく2つに大別される。

「地球」に関係するものをさらに2つに大きく分けて「資源」に関わるものと「環境」に関わるものに大別することができる。「資源」に関わるものとしては、人口の増大や地球環境の悪化に伴う食糧の不足、水資源の不足と汚染、エネルギー、医療資源、人的資源、観光資源、経済的資源などが枯渇する、不足する、インバランスになるという課題である。「環境」に関わるものとしては、大気汚染、CO₂の増加やそれに伴う温暖化、砂漠化、自然災害の頻発とそれによる破壊、生態系や気候の変動、そして発展途上国と先進国の間での環境倫理の不整合の顕在化などがある。

「社会」に関わるものは、ダイバーシティ³や格差問題を含む「多様性」に関わるものと、「人口」に関わるものに大別される。「多様性」に関わるものとしては、例えば、民主主義、資本主義といった既存の社会システムが多様性の前に機能しなくなってしまうこと、「Gゼロ」⁴といわれるように国際社会で誰も主導権を発揮し、牽引していくことができず、意見集約を図ることもままならなくなり、結果としてなにも決められないようになってしまうこと、新興国は20世紀の資本主義モデルに則り成長していくも先進国は縮小もしくは定常状態に突入するというインバランスのもとで地球全体としてはバランスをとっていかねばならないこと、さらにはテロや武力行使を含む国際紛争の頻発、難民の問題、貧富の格差拡大、民族間や宗教間の対立など様々な課題が発生する。「人口」に関わるものとしては、高齢

3：幅広く性質の異なるものが存在すること 4：G7を構成する主要先進国が指導力を失い、G20も機能しなくなった国際社会を表す言葉

図2：30年後を見た課題のマクロ整理



化、少子化、地方都市の消滅、都市と地方の人口偏在というような日本国内における課題のみならず、グローバルで見ると地球全体の人口の増加、新興国人口の膨張と先進国人口の減少に伴う偏在といった課題が発生し、地球という視点でも、あるいは日本国内という視点でも人口のインバランスがさらに増大するということになる。

これらの課題が「地球～自然」と「社会」の2つに大きく分類されているように、解決のための「知」も「自然科学系の知」と「人文社会科学系の知」の双方が求められる。これまでのような進歩主義的な科学技術への過依存から脱却し、さらに「自然科学系の知」と「人文社会科学系の知」を融合させる、本当の意味での「トランス・サイエンス」⁵な取り組みが実践されなければ、複雑に絡み合い、かつ互いにトレードオフとなるような30年後の課題は解決し得ないだろう。

このように30年後を見た時の課題というのは、その一つひとつを見ていると、それぞれの解決が難しいものであるが、現時点において提示できる課題解決に向けた視点を3つ定義しておきたい。

1つめは「スタビリティ、安定」である。これは国際社会が非常に不安定化する中で必要となる解決の方向性である。これから30年の間に起こる様々な変化により、これまで磐石と思われていた既存の秩序が一旦崩壊し、新たに再建されることになる。また、これまでのように自らの領分を守るだけで安寧を築くことはできなくなり、これまで干渉する必要のなかった「外側」への関与が求められる。「国際社会の平和と安全」といった安全保障に関わることで、先進国における持続的な定常化社会の構築、多様性がさらに顕在化する中での共生、災害

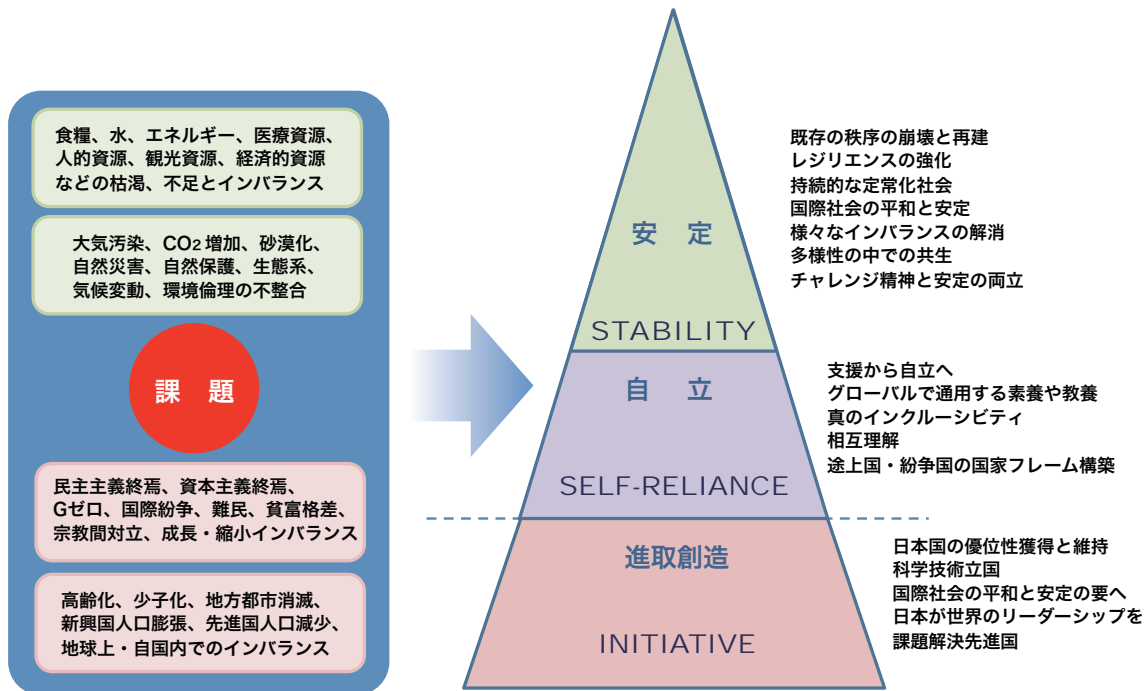
や紛争による破壊からのレジリエンス⁶強化、様々な格差やインバランスの解消などが「安定」というキーワードに含まれる。しかしながら、「安定」は必ずしも「全くの平等、あらゆることの均一化」の実現を目指すものではなく、これまで成し得なかった「チャレンジ精神と安定の両立」という難問も解いていかねばならない。

2つめは「セルフ・リライアンス、自立」である。これは今後の社会においては「インクルーシビティ」⁷を真に実現することが求められるが、最終的には「支援」ではなく「自立」を目標に置くことが重要との考え方である。例えば、貧富の格差、国の経済格差、社会的マイノリティ⁸、老人介護、新興国の国家フレーム未整備などの課題解決にあたっては、いつまでも「助ける側」と「助けられる側」が存在するのではなく、対等の立場で幸福を享受できる社会が実現されるべきとの考え方である。さらにはグローバルで通用するより広い素養や教養を身につけることによって、これからの地球社会において一人ひとりがしっかりと考えることができ、正しく生きていけるように教育を変えていくことも、これに含まれる。

3つめは「イニシアティブ、進取創造」である。これは、社会課題解決のための視点ではなく、けいはんな学研都市が、そして日本国が30年後も世界で優位性を持ち、世界の様々な課題解決に寄与することによって、世界中から尊敬を集め、経済的にも繁栄し、人々が幸福に生活できていることが重要であるという視点である。30年後は「課題先進国」ではなく、「課題解決先進国」として世界を牽引することで、国際社会の平和と安定の要となる、「そのために必要なものはなにか」を見極め、「そこ

5：科学なしでは解決できないが、科学だけでも解決できないことへの総合的なアプローチ 6：「回復力」「抵抗力」「復元力」「耐久力」 7：多様性を受容する社会のあり方 8：障害者、老人、子供、少数民族等の社会的弱者

図3：30年後を見た課題解決の視点



に力を集中し、協働していくこと」が重要である。

このように30年後を予測し、課題を抽出し、さらにそれを解決していくにあたり、その萌芽となる様々な変化や出来事についても一定の考察が必要である。現状における世界観や課題認識を含む様々な言説は世の中に溢れている。資本主義の終焉、大量消費・大量生産の終焉、GDP絶対主義の崩壊、価値創出源泉の変化、循環型・定常経済型社会への移行、価値観の多様化、コーポラティズム⁹の台頭、進歩主義の限界、宗教・道徳・倫理の再構築、科学と社会の関係性、日本固有の特性など、実に様々な観点から抽出され考察されているものと考えられる。30年後という遠い未来を予測し、課題を仮説化し、戦略構築していくためには、これらの言説からも変化動向や方向性を汲み取ることも、今後のアクションに取り入れていく。

長期戦略において効果的な打ち手は、現状の課題を裏返したようなものではなく、バックキャストिंगなアプローチが重要である。また、このような検討においては、一般的に、使うべき(使いたい)手段を先に提示するという方向に走りがちであるが、未来懇においては、シナリオに基づき、手段よりも目標とすべきところを明確にした上で、具体的な戦略に落とし込んでいくこととする。

9：大企業が資本力を背景に政策に介入すること